

草津雑信

(昭和二年十月一日より二十日までの執筆)

創刊苦心

—(一九二二)—

## 第一 信

十月一日。四時に草津へ着いた。

電車は豫定より六分早かつた。中途水害で線路がこわれて居て、乗換などがあつたにも拘らず……それで、上野より九時一分の旅程が八時五十五分に短縮された。汽車や電車の事故遅延は珍らしくないが、豫定より早いのは珍らしい。少くとも私としては今回が始めてだ。

紅葉は稍早い、秋草が咲き亂れて、絶好の秋日和であつた。それに久振りの快晴であつたものだから、淺黄服の運轉手君も、いゝ心持であつたものと見えて、ヘビーを掛けたのであつた。

車窓の眺めは嬬戀からがいゝ。五月末に、社中同人と大勢で来た時は、上野出發も、輕井澤乗換も同じ時間であつたけれども、淺間の溶岩見物の爲め、中途に一電車降りたので、嬬戀以東は暮色に包まれて居た。それに、あの時は、雜談の方が賑かたつたので、景色の記憶はハッキリしないが、今度

は子供と二人連たから、話もなく、本も読み疲れるから、眼は大概車外に向いて居る。自然、景色の印象も深かつた。

電車が輕井澤から信濃と上野の國境へ登る時も、振り返つた景色は悪くない。輕井澤が見えたり、沓掛が見えたり、遠く妙義の奇峯さへ眺め得られる。然し、あの登りは、電車が山の中腹を旋回するので、景色が見えたり、見えなかつたりして、せわしない。處が、嬬戀から白根山登りになると、電車が旋回しても、眼先に邪魔物が少く、眼界が遠く開けるから、淺間の雄姿を心ゆくまでに眺める事が出来る。眺めが雄大である。

白根方面から見る淺間は、裏淺間とも云ふべきか。信州で見る淺間とは姿が違ふ。彼は獨立した高山ではない。左(向つて)は小淺間を隔て、高原の裾を長く引いて居るけれども、右は高山に連らなつて山脈形をなして居る。彼は唯連峰の一起隆に過ぎない。然し、淺間は矢張り淺間である。彼は他の高山と連結しても、矢張り獨立の存在を失はない。彼は煙を吐いて居る。他の高山の眞似の出來

ない煙を吐いて居る。然も、此煙、決して只の煙ではない。怒れば火を吐き、天地を震駭させるのだから、誰ぞて其雄姿を認めぬ者はない。表から見ても、裏から見ても、淺間は矢張り淺間である。此日、淺間の煙は、信州方面から見た時は、白く渦卷いた雲のようであつたが、嬬戀へ來た時は、多少の黒煙さへ交へて盛に上昇して居た。草津へ着いて、直に一井旅館に入つた。是は、五月に一泊した宿であり、ツイ四五日前迄、愚妻と愚息が滞在して居た宿でもある。

一浴後、一寸町内を散歩し、夕飯を食べて寢た。時計は七時。表に豆腐屋式のラツバが鳴つた。是れから時間湯が始まるのである。

早寢をしたからさて旅の疲れを笑ふ勿れ。子供と二人では寢るより外しようがないではないか。

## 第二 一 信

十月二日。終日雨。但し細雨。私の宿は湯畑の前にあるが、細雨と湯煙りが濛々として向ふ側の人

家や樹木が、黒く、淡く、墨繪のように見える。

午前には薩摩琵琶が聞けたが、午後からは三味線の忍び音がする。餘情深し。何人の戯か。彈く主が惚はれる。雨の草津にも捨て難い風情がある。

私は、向ふ側の雜貨店から買つて來た草津案内を讀みながら、大方寢て暮らした。すみ子は、人形の着物の裁縫とお手玉で暮らした。入浴四回。但、内、二回は眞水の湯。たゞれを恐れてなり。

草津案内を讀んで、可なりの草津通になつた。次便には、受賣の草津案内でも書かうかと思つて居る。今日は東京も雨か。雨なら阿部君は、ベースボールが見られぬので、殘念がつて居る事と思ふ。

牛鍋が旨い。松喜以上也。牛鍋の旨い事は、五月に經驗して居るから、昨夜到着匆々食つて、今夜も又喰べた。明晩も、明後晩も、何時迄續くか、倦きる迄喰ふ積りた。

## 第三 二 便

十日三日。今日は日本晴れの快晴で誠に、氣持だ。此氣持で草津禮讚を書く。

『お医者様でも……』云々の俗談が廣く唄はれて居る爲めか、草津と云ふと、其名を知らぬ者はない然し、名は知つても實際を見た人は少い。草津の名を知つて實際を見ない人は、誰からさう誤り傳へられたものか、草津に對して暗い感じを持つて居る。曰く、草津は、癩病や梅毒患者がウヂヤ／＼して居る所だ。

草津温泉は癩病に特效がある。梅毒にも効顯があるとの事だ。だから、昔はそう云ふ患者が多く來て居たに相違ない。處が、明治四十二年に縣令が發表されて、癩病患者の入湯を禁止された。同時に草津より下流にある、湯の澤温泉を以て癩病専門の温泉所とされた。そこで、若し、同患者が誤つて草津に來れば、即刻管外の湯の澤温泉に移される事になつて居る。だから草津温泉には癩病患者は居ない。此點充分御安心あつて然るべしである。

梅毒患者に至つては、今も尙入湯者が多いであらう。然し、此病氣はさして傳染力の強烈なるものではない。病毒に接しても、こつちの身體に傷がなければ移らぬ位だから、恐るゝに足らない。殊に草津に在つては傳染絶無と云つてよい。

草津温泉は強烈なる酸性泉であるから、先づ第一に温泉が非常な殺菌力を持つて居る。それから温泉より立ち昇る蒸氣にも殺菌力がある。それには多量の遊離酸が含まれて居るからだ。草津は湯が豊富で、町中到處に湧く。湧かない所は掘れば忽ち湯が出る。元來、此土地の地層は火山岩で、濕氣が少く、沼澤泥土が絶無で、沼氣に瓦斯が発生しなくて、只さへ空氣が綺麗な所へ、温泉並びに温泉より發する蒸氣が土地と大氣の自然消毒を行ふから、町中は誠に清淨なる天地となつて居る。蚊も蠅も蚤も居ない。下等動物や細菌の生存を許さぬのである。

病毒の傳染に對して是れほど安全な温泉は他にあるまい。

草津の人家は硫黄に蒸されて、くすんで居る。草津の浴客は、療養本位の人が多いから、粗服を纏ふて居る。そして、それがタ／＼の爲めに、不恰好な姿をして歩いて居る。單に此光景を見た時は、

草津は暗いような感じが起る。然し、そう感ずるのは、近世科學の素養がないからで、草津温泉を理化學的に觀察すれば、誠に明るい、清らかな町で、仙境とも云ふべき別天地であるのだ。

其上、草津は風景がいゝ。大概の温泉は風景に乏しいが、草津は例外だ。

草津は海拔四千尺、白根山の中腹の盆地に在る。西北は高山に圍繞され、東南は幽谷を隔て高原に連らなつて居る。淺間、四阿、白根、萬座の諸山物々しく、其風景は極めて雄大である。風景温泉として亦日本有數であらう。

若し夫れ温泉の効能に至つては、之に及ぶものなく、土肥博士は海内無比と讃げ、ベルツ博士は理想的の理化學的療養所と推稱した。私が十年に一度の休養に於て、特に此温泉を選んだのも、夙に其特質を知つて居るからである。

## 第四信

三日と四日、二日續いて晴れたが、五日は曇、六日は又晴さなつた。此地で見る空は、清く澄んで何とも云へぬ美しさである。蓋し、空の色は一つは、見る場所に依つて異なる。年中黄塵にまみれて美しい空の色さへ知らずに暮す都會人の生活は、あはれである。

紅葉は日に々色を増して山中の眺めは頗るいゝ。たけ狩り、白根登り、いづれも妙なれども、氣の毒にも小生は、股間の皮膚病が逸早くタレになつて、歩行難澁、町中の軽い散歩が出来るだけで山登りなどは思ひも寄らない。終日、大方蟄居、原稿ばかり書いて居る。原稿は主として『銀行の見方』の書き直し。今日は草津禮讚の續篇として、温泉の効能を書いて第四信とする。

携帶の地理書を讀むと、空氣中の水蒸氣が冷氣に遭ふて雨となり、山層に浸潤し、火山岩に到達すると温泉になると書いてある。こんなことは誰も氣の付く自然作用だが、本に書いてあると、成程と感ずる。

同じ火山でも、白根山は淺間の如き禿山ではない。火口丘は流石に禿げて居るが、外輪山は一はい

の樹木。其樹木は多く針葉樹で、間々紅葉を交へ、今は秋の美觀を呈して居る。既に噴火を停止した元白根になるこ、火口丘にも樹木がある。

草津町は、樹木鬱蒼たる外輪山の中腹に在る處から、水が豊富である。到る處に玉の如き清水が滾々湧き出て居る。其清水の一部が火山岩に觸れて湯となる處から、湯も亦豊富である。各旅館には湯があり、町中十數ヶ所に共同浴場があるけれども、それ位の事では到底使ひ切れない。空しく流し去らるゝ湯が、川をなして居る。相州の湯河原などでは、現在湧き出でる湯は數軒の旅館しか支ゆる事が出来ないので、數百圓を投じて河原に井戸を掘り、湯を漁つて居るが、そう云ふのに較べると、草津は勿體ないほど湯が豊富である。

雨水の觸れる岩石は、餘程複雑した噴火作用を呈して居るものと見て、草津温泉は色々の成分を含んで居る。内務省の衛生試験所の分析表左の如し。

硫酸アルミニウム……………一、〇六五一

|                 |                          |
|-----------------|--------------------------|
| 磷酸アルミニウム……………   | 〇、〇一〇二                   |
| クロールカルチウム……………  | 〇、二七六三                   |
| クロールカリウム……………   | 〇、〇三二五                   |
| 硅酸……………         | 〇、二四九八                   |
| 游離硫酸……………       | 二、一六七四                   |
| 硫化水素……………       | 〇、〇〇五五                   |
| 硫酸亞酸化鐵……………     | 〇、三一〇七                   |
| クロールマグネシウム…………… | 〇、一二七九                   |
| クロールナトリウム……………  | 〇、〇九三一                   |
| クロールアムモニウム…………… | 〇、〇〇三一                   |
| 硼酸……………         | 〇、〇一五〇                   |
| 游離鹽酸……………       | 〇、三〇八五                   |
| 放射能             | 作(鑛泉中に……………〇、一三乃至〇、二二マツヘ |
|                 | 湧出瓦斯中に……………〇、六三乃至一、三七マツヘ |

表中放射能作何程とあるのは、ラジウム、エマナチオンの含有量を意味するものである。それは、今回、この地で本を讀んで知つたのだ。然し、放射能作が何『マツへ』あれば、ラジウム、エマナチオンが多いとすべきか、少ないとすべきか、其處までは知らない。

エマナチオンとは、ラジウム化合物より發する瓦斯である。是が人體に利くのである。ラジウムは、只物を寫す作用を持つて居るものらしい。

エマナチオンが人體に觸れると、(一)融解作用を起させる、(二)新陳代謝興奮作用を起させる、(三)炎症防止作用を起させる。これで諸病がなほる事になるものである。か。

温泉瓦斯が充滿して居る草津町には、自然多量のエマナチオンが浮遊して居る。それからオゾンも浮遊して居れば、酸も浮遊して居る。其上氣候がよくて、濕り過ぎて居なく、乾き過ぎて居なく、中和を得て居る。そこで、草津は温泉に這入らなくとも、呼吸器病や心臟病や脚氣や精神病に利くのである。

次に温泉はさう云ふ効能があるかと云ふと、右の分析表を見ても分る如く、此温泉の主成分は硫酸と鹽酸とで、就中硫酸が最も多い。そこで入浴すると、硫酸と鹽酸が皮膚面の腐蝕作用を行ふので、病菌が殺され、アカや脂肪がなくなつて、皮膚が滑かになる。松川二郎氏の著『療養本位温泉案内』に此温泉の働きを最もよく書いてある。左に之を轉記する。

一、皮膚を刺戟して發汗を行ひ、食慾を増進し、血行並に呼吸を活潑にし、體内の老廢物を排泄して、新陳代謝を盛ならしめる。

二、皮膚柔軟となりて充血を來たし、吸收力を促進して、潰瘍面創面を洗滌して、腐敗の作用をなし、良性肉芽の發生を促し、直接藥劑的効能を奏す。

三、皮膚刺戟を直に反射して、腦神経は勿論、諸臟器を興奮せしめて其機能を活潑ならしめる。

四、皮膚の刺戟多大なるを以て、内部に潜伏する疾病は漸次外部に誘導せられ、内科的疾患を變じて外科的疾患と化し、不治の宿痼をも全治するに至る。是が草津温泉の特色として大に賞揚せら

る、効能である。

五、温度高き爲め、抵抗力を増加して強壯ならしめる。

適應症は金創、外傷、打撲傷、皮膚病、禿頭病、頑癬、梅毒、淋病、痔疾、子宮病、胎毒、慢性呼吸器病、氣管支カタル、肺病、腦病、脊髓病、神經衰弱、神經痛、胃病、疝氣、便秘、慢性腸カタルヒステリー、リウマチス、トラホーム、糖尿病等。

當温泉が皮膚病に最もよい事は我々が一寸考へても分る。古來、梅毒に最も利くように傳へられて居るが、根治するか否か疑はしい。六〇六號等の補助療法として、最も効能を發揮するものらしい。

## 第五 信

今日も續いて温泉の事を書く。

草津の湯は熱いとは限らぬ。熱いのは時間湯の事で、旅館の内湯はぬるめてある。私の泊つて居る

一井旅館などは、内湯が十はかりあつて、お好み次第の温度にしてある。

然し、ぬるくても刺戟は強い。入浴時間は三分か、四分が適度、五分以上はいけなからしてある。

イキナリ湯壺へ飛び込んでもいけない。飛び込む前、ヒシヤクで、少くとも二三十は頭へ湯をかぶつた後ちにしなければならぬ。是れは血行の循環を平均的にする爲めである。でないに、往々腦貧血を起すぞか。度数も無暗に多くしてはいけない。一日三回か四回が適度であるぞ云ふ。

當温泉には、斯うした規則的の束縛があるのを、聊か窮屈に感ずる。是が當温泉の缺點である。他の温泉の奔放自在なるには、遠く及ばない。特に、我社同人の相澤老や阿部老や神長倉老には不向きだと思ふ。先生達は湯壺へ這入つたり出たりしながら、一時間も無駄口をきいて居なければ、温泉らしい氣持がしないぞ云ふのだから、始末が悪い。當温泉にそんな事をしようものなら、次の時間には忽ち病院入りをしなければならぬ。

ぬるい湯より熱い湯の方が、上つた跡が氣持がいい。そこで、當温泉へ來た當座は、熱い方に恐れ



をなして、ぬるい方にはかり這入るが、日が経つに従つて、熱い方へ這入るようになる。特にタムレが出るご、ぬるい方はシミて苦しいので、熱い方へ行く。更に進んで高温の時間湯へも行くようになる。私などもソロ／＼熱い方が好きになつて來た。

遊覽を兼ねた客は大概旅館の内湯に止めて置くが、療養本位の客になると、必らず高温の時間湯に行く。此の方でなければ本當に利かぬご、古來言ひ傳へてあるからだ。但し、醫者はそう云はない。ぬるくても熱くても効能は同じだ。寧ろ篋棒に熱いのは身體に害があるご云つて居る。

時間湯の經驗も面白からうと思はれるが、それに這入るご、一ヶ月以上滞在しなければならぬ。私などはその方の事情が許さない。

## 第 六 信

今日は雨だ。同じ雨でも、今日は薩摩琵琶も、三味線の音も聞けない。風流の浴客は最早療養を終

へて、歸郷したものであらう。唯、秋雨が蕭々々降つて居る。たまに聞ゆるのは時間湯の湯もみ唄たけた。

時間湯は、那須温泉にも在るそうだ。詰り、湯が熱いから斯う云ふ制度が生れるのである。

熱い湯は、動くご、響く。お互にジツとしてゐなければならぬ。そうするには、入浴者が行動を一律にしなければならぬ。別々に這入つたり、出たりしては、響いて堪らない。大勢が時間を限つて、揃つて入浴する處から時間湯ご云ふ。

揃つて入浴するには、誰か號令者がなければならぬ。昔は湯に慣れた人が代る／＼號令をした。處が、明治の初年に桂燕玉ご云ふ講釋師が、暫く音頭取を務めた。職業柄だけに頗る旨い。浴客は彼を敬して隊長々々と呼んだ。爾來隊長が一つの専門的職業ごなつた。現今では之を湯長ご呼んで居る。語源は湯の隊長で、それを詰めたものである事は云ふまでもない。

時間湯は町營ごなつて居る。無料で誰が這入つてもよい。現在、町中に五ヶ所ある。熱の湯、松の

湯、鷺の湯、千代の湯、地藏の湯がそれである。外に共同浴場が七ヶ所ある。是れも町營で、入浴勝手、白旗の湯、瀧の湯、關の湯、綿の湯、玉の湯、富の湯、仁川の湯と命名してある。

時間湯には、夫れ々々専屬の湯長が居る。是が毎日浴客に號令して居る。入浴は日に四回行ふ。六時と十時と二時と七時である。時間は三分。降つても、照つても、夏でも、冬でも、必ず毎日四回宛行ふ。

浴場の規模は場所に依つて幾分違ふが、町の中央に在る熱の湯が最も大きい。私は此熱の湯の前に宿泊して居る。建坪百坪ばかりの平家で、中央に四間に六間位の大浴槽がある。之を四つに區劃してある。そして第一槽には、岩石の間から湧き出た熱湯を其儘導き、更に之を第二槽に移し、以下三槽四槽に及ぶ仕組にしてある。

第一槽の熱度は百四十五度位。それが第二槽へ移ると、五度低下して百四十度となる。三槽四槽はそれより更に五度低く百三十五度位である。

時間になると、ラツバを吹く。東京で聽く豆腐屋式のラツバである。あれを長く吹く。すると、周圍の旅館に居る浴客が三々五々ヒシヤクミタオルを手にしながら集つて来る。直に裸體か襦袢一枚になつて湯もみをやる。湯もみは板を以て湯を攪拌するのである。これは、湯の熱度を下降させる爲めと、湯の成分を混和させる爲めとである。湯もみは揃つてやる。唄をうたひながら……。其光景は勇壯である。板の音がコトン／＼とする。湯が涼々の音を立てる。それに調子を合はせて浴客が湯もみ唄をうたふ。陰鬱な雨の日でも、此の聲を聽くと、はれ／＼とした氣分になる。斯くする事凡そ三十分。すると温度が二十五度位下降する。湯長はそれを見計らつて柝をチャン／＼と打つ。止まれの號令である。

一同直に湯もみを止めて、携帯のヒシヤクで頭へ湯をザブ／＼注ぐ。血行調節の爲めで、五十はいから百はいに及ぶ。

それを終つた頃、湯長は又柝を打つ。是れは用意の號令である。一同、浴槽に懸け渡してある板の

上にしやがむ。それを見て湯長は號令を掛ける。熱の湯の湯長は聲がいく。凍らした美聲が遠く屋外まで徹する。

最初の令は

『よろしうございますか。』

と云ふ。衆之に應じて

『オーイ。』

と答へる。次いで湯長は

『はいりませう。』

と云ふ。衆又之に應じて

『オーイ。』

と答へる。そしてソロ／＼浴槽へ體を入れる。

強い者は第一槽に入る。次ぎは二槽、三槽、各々好む所を選ぶ。見渡せば、第一槽に入る者は甚だ少い。多くて二三人。大抵の時は誰も這入り手がない。自然三槽四槽に集まる者が多い。

一同が浴槽に入るに、湯長は

『揃つて三分。』

と云ふ。衆又之に應じて

『オーイ。』

と答へる。湯長が一令する毎に、必ず『オーイ。』と答へるのである。

一分経つと、湯長は

『改正の二分。』

と云ふ。アト二分と云ふ意味である。浴客はモウ顔を赤くして居る。更に一分経つと、湯長は

『一分。』

と云ふ。此時『オーイ。』と答へる浴客の聲は、我慢に満ちて居る。中には我慢がし切れなくて、鉢巻の顔を眞赤にし、藻掻き出そうとして居る者さへある。湯長すかさず、

『ちツくり辛棒。』

と云ふ。衆又之に應じて

『オーイ。』

と答へるが、其聲には以前の如き元氣がない。是れより浴客の苦痛益々募り、一秒の経過も待ち遠しい。湯長は之を激勵して

『辛棒のしごころ。』

と云ふ。衆又『オーイ。』と答へるが、其時の『オーイ。』は悲鳴に近い。

湯長間もなく

『上りませう。』

と云ふ。一同待ち兼ねて、脱兎の如く上る。斯くして一回の時間湯を終るのである。

熱の湯の湯長は湯本米藏と云ふ。勤務二十年に及ぶ。先代野島小八郎と共に、名湯長の名が高い。湯を掬ひ、脈所に垂らし、温度を計る。曾つて一度の相違もない。寒暖計の名がある。當代も先代も共になつかしき我越後の出身である。

## 第七 信

寝ながら萩原秋水氏著『草津温泉』の讀み残りを讀む。此書は、草津に關する事は何でも書いてある。其上、人の書いたものまで集めてある。面白くて有益で、我々浴客に取りて、無くてならぬ良書である。巻末に草津聖人といふのを載せてある。これは秋水氏の作でなくて、草津小學校長川村新次郎氏が書いたのを抜萃したのであるが、之を讀んで、私は非常に感動した。『草津温泉』は此一文を載せる事に依つて一層良書となつて居る。イデヤ私も、此聖人をダイヤモンド誌上に紹介するの光榮を

有したい。埒もない私の雜信も、此紹介文を書く事に依つて、有意義のものにならうと思ふ。

草津より澁峠を経て長野市に至る山道は、所謂草津街道の一つであつて、四時浴客其他の往來が絶えないが、何分にも嶮阻で困る。雨が降ると、損所が出来て、人馬の通行に差支へるようになる。すると、何人か来て、土を盛つたり、石を起したりして、立派に道路を修繕して歸る。勿論、其人は縣廳の道路管理人でもなければ、温泉宿の雇人でもない。得體の知れない人物が、風の如く來つて風の如く去つて仕舞ふ。奇篤の行爲はこればかりではない。冬、雪が降つて、山道が一層險阻になると、草鞋や杖を一二丁毎に置いてあつて、行人の使用に任せる。夏には、雨宿りの小屋を造つて呉れる。峻嶮二里の山道に、人家が一軒もないのだから、俄雨などに遭ふた場合、行人の助かる事一ト通りでない。其小屋は秋になると、取形付けられ、翌年又造られる。その他、小橋が落ちても、堤が崩れても、チャント修繕して呉れる。清水が湧いて居る所へは篋を掛け、草が繁ければ取り拂ひ、雪が積れば拂ひ除けて呉れる。然も、斯かる篤行は、澁峠ばかりでなく、六合村への通路でも、長野原への街

道でも、苟も草津と往來交通のある所であれば、悉く行はれるのである。

草津は冬になると、殊の外寒い。労働者などはヒッ、アカギレに惱まされる。斯うなると、あはれむべき労働者の爲めに、天から膏藥が降つて来る。即ち草津管外の贅川の湯や、富の湯などには、膏藥を入れた竹筒が入口に懸けてあつて、誰でも使へるようになっている。更に又、夫等の貧しい家には夜中人知れず戸口に大根や午莠を置いて行く事すらある。

此篤行者が何人なるかは、最初のうちは誰も知らなかつた。然し、久しきに及んで、誰云ふことなく五郎次さん々々と呼び、其徳を讃へる者が多くなつた。

五郎次さんとは誰か。それは富豪でもなければ、偉人でもない。社會から殆ど存在を認められない一人の日傭稼ぎであつた。

五郎次さんも、なつかしき我が越後の出身。新潟縣南蒲原郡牛野尾村が其出生地で、弘化二年十月十五日の生れであつた。父を藤野角平といつたが、生れて三日にして母を失ひ、隣村森町村大字長野

村の安仲安藏に養はれた。そこで氏も姓を安仲と稱へた。養家も極めて貧乏であつた處から、二十歳になるや諸方に出稼ぎし、その賃銀を養父に送つた。諸方を渡り渡つて草津へ來たのは、明治七年であるが、其間二十年、曾つて送金を怠る事がなかつた。養父母が世を去つてからは只管追善供養を營み、窮者に布施する事を樂みにした。明治十三年草津の旅館湯本平内の雇人となり、後ち松村屋五郎平方に轉じた。いづれに在つても、こくめいに働いて主家に盡した事は勿論であるが、傍ら畑を耕し野菜物を知人に贈つたり、暴風を冒して病人を救助したり、夜中忍び入つた盜賊を説得して改心させたりして、大に善行を賞揚された。後ち、さゝやかな一家を營み、相變らず日傭稼ぎに日を送つたが其餘力を以て道路修繕其他をやり、公共に盡したのである。戊申詔書の發せらるゝや、群馬戊申會で表彰せられ、次いで賞勳局から賞狀及銀杯を賜はつた。

大正六年七月、病を得て死んだ。享年七十四歳。其死期の迫るを知や、日頃畏敬せる草津小學校長川村新次郎氏から病床に來て貰ひ、死後屍體を解剖に附して、幾分にては醫學上に貢獻せん事を依頼

した。草津療養院長石田謙治氏執刀、高平長郷、下屋昌平の兩醫學士立會、本人の望みの如くした處肋骨左五枚目の一本挫折し、其個所より支障肋骨が生じて居るのを發見した。是れは壯時足尾で負傷した爲めである。支障肋骨の發生は實地に見ることは稀れで、大に益する所があつた云ふ。

五郎次さんは死後安仲五郎次翁と呼ばれるようになった。其墓標は草津風光の地に建てられ、其篤行は今尚ほ語り傳へられて、草津町の誇りとなつて居る。

## 第八 信

草津温泉は、夏多く出て、冬少い。草津温泉は、夏熱くて、冬幾分温度が下る。此事實からして、理學博士小藤文次郎氏は、次の如き斷定をして居る。

草津温泉は雨水であつて、地下水でない。草津温泉の泉源は、草津町の上邊に在つて、地下から上昇するものではないと。

成程さうなづかれる。

草津温泉は、明治四十四年から大正二年までの間に、温度が一二度下つた。下つたまゝ、其後恢復しない。此事實を見て、小藤博士は又次ぎの如き斷定をして居る。

今後五十年経ては、草津温泉の温度は五十度以下に下り、古來有名な特殊入浴法が無くなるであらう。こいつあ餘り當にならない。地球は漸次冷却し、火山は漸次死滅に近づく云ふ過去の推移からすれば、温泉も亦漸次温度を下降するものに相違ない。然し五十年に十度の推斷は餘りに仰山だ。

果して五十年に十度位づゝ、温度が下降するものであれば、今から二百年三百年前には、此温泉は篋棒に熱度が高かつた筈である。當時未だ検温器の發明がなく、温度の記録がないにしても、近寄ればヤケドをするほどの熱さであれば、何ぞか記録がありそうなものだし、又、左様に熱つければ、此温泉が幾百年の昔から開ける筈もない。そこで、地震學の大森博士は此説を打ち消し『草津温泉の熱度が時によりて多少の相違があるにしても、漸次遞減する道理がない。神戸の地震で有馬温泉の熱度が

増した例もある。』と云つて居る。

さうしても此の説に賛成したい。又、さうあつて欲しいものだ。天下の靈泉が僅か五十年か百年の後ちに、其特色を失ふようになっては大變である。

此頃は曇天や雨天が多い。新聞を読むと、太陽黒點の爲めに東京あたりも最早十一月頃の寒さだがあるが、それかあらぬか、海拔四千尺の寒さは底びねして閉口だ。終日躰居して長火鉢の傍らにうづくまつて居る光景は、少々隠居じみて居る。一つ白根山登りをやつて歸らうかと思ふ。勿論、歩けない。歩けなくとも馬がある。馬の音を藉りて火山に登るのも亦一興ではないか。

## 第九 信

二十日に歸へるさ極めたら、急に活動して見なくなつた。白根山登りが第一の希望だけれど、馬の具合を訊いて見ると、さうも危ツかしい。

馬には一人乗と二人乗とある。一人乗は洒落れて居るが、さうもゴツ／＼したクラが氣になる。二人乗は槽と稱へる。馬の脊へ槽を載せ、それへ二人乗るのだと云ふ。親子二人乗れば至極好都合だが馬がつまづきでもすれば、谷底へ投げ出されて、これも氣になる。馬はやめにした。

籠は……さきくさ、あると云ふ。然し、値を訊いて驚いた。一挺十二圓では乗れない。馬は一人乗五圓、二人乗八圓である。

そこで、籠もやめにした。やめて、さうして殺生河原まで行く事にした。

今日は、晴れては居るが、白根山の方だけ曇つて居る。殺生行きには適當な天氣ではないが、明日は又さうなるか分らない。降らば降れ、さ度胸を極めて出掛ける事にした。

一行三人、私にすみ子に、今一人は、此地で出来たすみ子のお友達のさねちゃんと云ふ少女である。晝飯を食べて湯に入つて、それから出掛けた。二時頃である。ドテラで、下駄穿き、頬冠り。山中の生活は氣樂でいゝ。水筒の用意がないからカルピスの空壺を利用した。

先づ西の河原へ行つた。西の河原は町の西方に在る谷川である。温泉が所々方々から湧き出て湯の川となつて居る。此の所の温泉は毎度申上げる如く、硫酸が強いから、湯氣と臭氣が一寸凄いような感じを與へる。そこで、最初賽の河原と名づけた。然し、それでは餘りひどいから後ち西の河原と訂正したものらしい。飛石傳ひに、此河原を登つて行くさ、真中に小山がある。先づそれを登らねばならぬ。東京で云へば愛宕山位の高さだが、登りが急だから樂でない。私は此所で先づ一汗かいた。

此附近は紅葉の名所だが、惜しい事には盛りを過ぎて居た。

小山を通り抜けるさ中山にぶつかる。元白根の外輪山の一つである。見上げた處千尺位の高さ。これだけに成ると私には泰山のように見える。其上、道が一直線について居つて、登りは頗る急である。水力電氣の水管を傳つて、登るより尙ほ急である。然し、此山の頂上へ登つたら、さぞ眺望が佳からうと思ふさ、元氣が出る。杖を力に大に登つた。途中四五回休んだ。振り返つた景色が中々いゝ。なつかしい草津町が谷底に小さくなつて見える。赤城、榛名の裾からうねりにうねつて來た山々が、秋



の陽を受けて、直ぐ我々の眼前に浮び出て居る。殊に、我々が登るに従つて夫等の山々の奥へ、高い山が段々に抜け出て来る光景が面白い。頑是なき少女も山岳美に打たれて思はず聲を發し。

『あら、いゝ景色だ。』

を繰返す。唯、残念な事には、浅間が見えない。是れは隣の山に遮られて居る爲めである。

子供に導かれて漸く登り切る。風が颯々當る。汗の體にも堪ゆる程の冷さだ。東京ならば嚴冬の風である。

三人勇を鼓して進む。暫く道は平坦であつて、枯草の高原を過ぐ。十四五丁にして、奇岩怪石の亂立せる山腹に突き當る。見上ぐる空は雨を含む黒雲が山嶺に渦巻いて居て、只ならぬ光景を呈して居る。雨がバラ／＼と。然し、振り返れば直ぐ眼の先が晴れて居る。東方の山々には秋の陽を浴びて、遠く赤城、榛名の姿さへ見ゆる。三人雨を冒して進む。間もなく霽れる。奇岩怪石の間を二三丁登ると、凹地へ出る。其處が殺生河原である。岩石の間に枯木が亂立して滿目荒涼として居る。凹地の一

方に沼がある。沼の水は硫酸と亞硫酸を含んで居る。動物が此水を飲むと死ぬ。附近の光景が凄慘で水が毒分を含んで居る處から、殺生河原の名が生れたものである。高山植物を數種採取して歸る。歸つて寢て起ると、翌朝、白根山は雪になつて居た。本年の初雪だ。是で寒さのひさかつた事が分つた

## 第十 信

私の従弟に川瀬文藏と云ふのが居る。私は生れた年から母の實家に引取られ、文藏の弟として育てられたものだから、眞實の兄と同じに思つて居る。文藏は長男に生れた悲しさに、越後の片田舎に土着して居るが、草津温泉に對しては、先覺者である。彼は今から三十年前に草津に遊んで居る。然も前後三回此温泉に長期の入浴をして居る。そこで、私の雜信も昔の思出に讀んで居るらしいが、私に書を寄せて、こんなことを云つて來た。昔、草津にお駒さんと云ふ男裝の女が居つた。性來痴鈍で少し足りない方だが、運命が悲愴なものと動作が滑稽なもので、草津名物の一つとなつて居た。今はモウ

死んだであらうが、なき跡を尋ねて草津たよりに一筆してやつたらどうか。薄命の彼女に對して、それが何よりの追善になるぞ。

話の筋が面白そうだし、退屈の折柄でもあるから、其お駒さんなるものを早速番頭に訊いて見た。

『あゝ、あの駒さんですか、今でもピン／＼して熱の湯に働いてゐますよ。』

こ、番頭は即座に答へた。安仲五郎次翁よりもこの方が話が早い。そして、私も熱の湯こ云はれて、それこ思ひ當つた。

熱の湯こは、私の宿の直ぐ前に在る時間湯の事である。私は時間湯には這入らぬが、時々見物に行く。するこ其都度其處に一人不思議な人物が居るのを見受ける。顔を見るこ男らしいが、姿を見るこ女らしい。頭は五分刈にして居る。着物は男女共通のチャン／＼を着て居る。これだけなら誰でも男と見るが、掛けた襷が赤入り模様で女らしい。そこで女かなと考へる。先づ尼さんが還俗したこ云ふ形である。

『あれかい。』

こ、番頭に訊くこ

『あれです。』

こ云ふ。さらば、さう云ふ氏素性かこ疊み掛けて番頭に訊いた處、彼は若いから昔を知らない。唯、茶話會に猫踊をする事だけ知つて居る。そこで轉じて、宿の主人に訊いた。この方は禿げて居るからよく知つて居る。そして私の間に答へた冒頭の一語からして既に振つて居る。

『駒々こ云ふけれど、あれは本人の名でなくて、猫の名ですよ。』

こ、来たものだ。猫が人間の名を貰つて居るのはよくあるが、人間が猫の名を貰つて居るのは珍らしい。それから主人の語るを聽くこ、彼女は本名を神林しげこ云ふ。

『駒よ、駒よ。』

こ猫をたづねて草津町に來たので、それが名になつたのであるそうなる。生れは正しく、東京邊の資産

家の娘であつたが、火災で丸焼けになり、裸で草津より一里ばかり先きの處へ一家引越して來た。そして畑を作つたり、木の實を取つたりして細々生活を支ゐて居たが、そのうちに一家死に絶へてしげのみ残つた。生憎、痴鈍に生れて來て居るので、嫁にも行かれなければ、婿をも貰へない。家出した猫を尋ねて草津へ來て、時間湯に使つて貰ふようになり、今日に至つたものであると云ふ。

駒さんは今年六十三になること云ふ。春も知らずに一生を過した。薄命の境遇に居て薄命を知らず、多くの浴客にからかはれながら、下級の勞働に甘んじて、一生を終る彼女の運命も、見方に依つて幸福とも考へられる。

## 創刊 苦 心

昭和五年五月十二日印刷  
昭和五年五月十五日發行

—定價金五十錢(送料二錢)—

編輯兼發行人 東京市麴町區内幸町二ノ三 石 山 賢 吉  
印刷 東京市麴町區内幸町二ノ三 飯 野 虎 吉  
印刷所 東京市麴町區内幸町二ノ三 ダイヤモンド社印刷部  
發行所 東京市麴町區内幸町二ノ三 ダイヤモンド社  
電話銀座三六〇・三六二・三六三  
振替東京二五九七六番



終

